

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	管理者と職員は、法人の理念・ホーム独自の理念をよく理解し、共有化を図り、日々実現に向けたケアの実践につなげている。	事業所の理念には地域密着型サービスの意義や役割が盛り込まれており、具体的な言葉で表現されている。玄関に理念を掲示し来訪者の誰にも分かり易いようになっている。職員会議では理念を振り返りながら話し合いが行われている。職員は法人及び事業所の理念を共有し、日々のサービスで実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	近所の方との日常の挨拶、清拭用布の寄付、保育園との交流会、お祭り見物(祇園祭等)、年2回の避難訓練への自治会役員の参加等つながりが広がっている。	自治会に加入し地域の幅広い年齢層の人々との交流が行われている。毎月、保育園児が訪問し歌をプレゼントし入居者も歌でお返している。高校生・専門学校生の実習やホームの夏祭りに合わせて中高生のサマーチャレンジの受け入れを行っている他、地域の各種ボランティアの訪問も定期的にある。また、夏には近くの商店街で開催される七夕祭りや夏祭りに出かけ住民との交流に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	月1・2度見える音楽・お話ボランティア(各1名)、土曜日には、音楽ボランティアの来訪がある。福祉学科のある市内の高校や専門学校の実習の場として、また、中学生、高校生のサマーチャレンジボランティアの場として受け入れをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者代表、家族代表、地区代表、地域包括、地域センター職員、市高齢者介護課職員、ホーム管理者、職員1名による会議が2ヶ月に1回開催されている。	事業所の活動や入居者の状況、行事などを報告し、参加者との質疑応答や意見・要望を伺うなど双方向的な会議となっている。消防署の方もメンバーとして加わることもある。会議で得られた意見や助言については職員会議で報告し、サービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	法人として市とは、密に連携をとっている。運営推進会議の中でも活発に意見交換され、協力関係を構築すると共に、常にサービスの質の向上に取り組んでいる。	市主催の地域密着サービス研修会(年2回)に参加している。市派遣の2名の介護相談員が年4回来訪し入居者と一緒に過ごしている。入居者の更新申請代行で市の窓口に出向いた時に入居者の暮らしぶりや事業所の様子を伝えている。また認定調査員が訪問した時には本人の心身の状態を伝えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	理解し、玄関のセンサー、コールマットの使用、ベッドの下にマットを敷く等の工夫をし、拘束しないケアに取り組んでいる。	全職員が身体拘束の内容とその弊害を理解しており拘束をしないケアを実践している。落ち着かず歩き回ったり、外出傾向の入居者など問題行動があった場合には職員間で対応を検討し「拘束には頼らない」支援に取り組み、入居者が安全で自由に暮らせるように努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法をファイルし、読みあわせを行っている。高齢者虐待のビデオ学習を行い、また、虐待の徹底防止に努めている。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護事業や成年後見制度についての資料をファイルし、読みあわせを行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	重要事項の説明等詳しく行い、入居前には、施設の見学をして頂き、納得した上で契約の手続きを進めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情相談窓口および地域の第三者委員は重要事項説明書に明示されており、入居契約時に、入居者・家族に説明はされている。玄関に意見箱が用意。面会時に声掛けをするなど気軽に相談出来るような、雰囲気づくりに心がけている。	毎月の請求書郵送時には暮らしの様子や今後の予定などを書いた手紙とホーム通信(発行時のみ)を同封し家族に送っている。「毎月、どのように暮らし、どこへ出かけたか詳細に報告があるので安心して」と家族等は喜んでいる。家族会は敬老会や新年会を兼ね年2回あり、殆どの家族が複数で参加し賑やかな会となっている。意見箱はあるが活用されたことはなく、家族等は何かあれば直接職員に伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に各職員の意見を聞き、運営に反映させている。	毎月の職員会議では議題に沿って活発な意見交換が行なわれている。目標管理シートが導入されており、管理者が年2回面接を行い、職員が向上心を持って働けるように動機づけを行なっている。また、管理者は日常的にも職員と個人的に話す機会を持ち、相談に乗ったり知識や技術を伝え、現場の声も大切にし活性化を図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人として就業規則に則り勤務状況を管理しており、やりがいとしては、個々の目標管理を管理者が集約し、習得すべき年度の目標設定を達成できるよう配慮・努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修は法人内外への復命の他、三段階に分けられている。また職員基本研修を年に5回予定し必ず出席する。ホームとして本年度職員一人あたり2回は各種研修会に参加するということが決められており、実行に移されている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣の2グループホームと相互交流をしている。又本年度より、法人内のグループホーム(かるいさわ敬老園)とも交換研修を実施。互いに出来るところから取り入れ、サービスの質の向上を目指している。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス開始以前に本人と面接を行い、本人自身の訴えや願いをよく聴き、受け止めるように努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期の段階から、困っている事等を聴き、安心して利用して頂けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談の段階では、まず本人・家族の話をしっかりと聴いて、内容によっては他のサービス活用を勧めることも考え対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	昔ながらの風習や料理、方言など入居者に教えて頂くなどすることにより、異動などで交代があってもすぐにとけ込め、支え合う関係づくりがなされている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日々の様子や変化等、家族に報告し共有して、支援の方法・対応について意見を交換している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人、家族と会ったり、ご自宅や周辺などの馴染みの場所に出掛ける機会を作っている。	地域の人々や入居者の友人・知人など誰でもが訪問し易いホームづくりに心がけている。他県にお墓がある入居者は家族と温泉に一泊してお墓参りをしている。また、美容院へ家族と出かけ髪を染めたりパーマをかけるなど家族の協力を得ながら馴染みの人達との交流や懐かしい場所へ出かけている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲の良い利用者同士が交流を持てるように配慮している。また、孤立しがちな利用者には調理、盛り付け、洗濯物たたみの中で、皆の輪の中に入れるようにしている。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談があれば対応する。終了する際に、利用者や家族にその旨きちんと伝えるよう心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの希望を聴きながら支援している。意思疎通が困難な方には、家族などから情報を得て検討している。	自分の思いを言葉で表せる入居者は現在1名である。意思表示が難しい方についてはその方の様子からやりたいことなどを職員が推し量っている。入居者のペースを保つように歩行訓練、作業、ゲーム、散歩など個別に支援している。入居者がどの程度理解しているか分からないがどんなことをしたら喜ばれるのか試行錯誤しながら「嫌がることはしない」という大前提を職員が徹底している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を活用して個々の生活歴を把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々、勤務交代の際の申し送りや記録によって情報を共有し、対応を考えている。月に1度処遇会議を実施し、その人その人に合う暮らし方とそのための支援を検討している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者を中心とし、本人・家族の意見を聴いたり、個々の担当職員に毎月モニタリング表を記入してもらい、月1回の会議で検討している。	毎月モニタリングを行いケアの見直しを行っている。本人の心身状態に変化が生じプランが実行できないと判断された場合には処遇会議で検討し現状に即した新たな介護計画に作り変え家族に説明し確認印を頂いている。訪問調査時、ターミナルに入る入居者の介護計画を作成中であった。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	些細なことも個別記録に残し、その場に居なかった職員にも情報が伝わるよう努め、実践や計画の見直しに活かしている。また、毎月のモニタリングでケアの見直しを行い実践している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が高齢であったり、緊急の場合は通院介助をしている。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ホームサイドで考えつくサービス(傾聴・読み聞かせボランティア等)の提供や、学生のボランティアや研修を受け入れ、日常生活に変化や刺激を加えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は原則、ご家族に依頼している。受診に際しては、情報提供書を書いたり、体調に変化のある時は、職員や訪問看護師が同行している。	かかりつけ医は入居後も継続している。家族の意向で毎月2回往診を受けている入居者もいる。週一度訪問看護ステーションの看護師が訪問し入居者の健康維持管理を行なっている。変化や異常が見つかった場合にはかかりつけ医や医療機関に相談し、適切な治療が受けられるように対応している。また訪問看護師とは24時間の連絡・相談が可能である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと医療連携を結び、定期的な訪問によって各利用者の日常の健康管理に努めている。医療的な支援が必要になった際は、密に連絡を取り支持を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された際には、医療関係者と情報交換し、早期に退院できるように努めている。又退院に際しては、訪問看護師に同行をして頂いたり、訪問リハビリを行って頂くこともある。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	法人としての「看取りの方針」が作成されており、家族、医師、訪問看護師、職員等、関係者で話し合い、検討されている。ターミナルケアについての同意書も家族と交わされている。	看取り支援で最期をホームで迎えた方は今までにいないが、看取りの予定で対応していた入居者が直前になって病院に移り、最期を迎えたことはある。現在、看取り対応の方が生活している。本人や家族の意向を尊重し、ホームで穏やかな最期を迎えられるよう精一杯支援していきたいと全職員で取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年2回、救急法について研修があり、職員は必ず参加するようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	総合訓練を年2回行っている。1回は地区の自治会の協力も得て避難訓練を行う予定。もう1回は、手順の確認を行っている。	2月には事業所独自で夜間を想定した避難のイメージトレーニングの研修を行った。8月、消防署の指導を受けながら避難誘導や消火器の扱い方などの訓練を実施した。11月には消防団と自治会の協力を得ながらの夜間想定訓練を予定している。避難訓練には車椅子の入居者も含め全員が参加している。スプリンクラーは今年3月に設置済みである。	

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの尊厳・情報保護について職員は理解しており、利用者の誇りやプライバシーを損ねるような対応・言葉かけはしていない。	人格尊重、プライバシー保護等は全職員が基本研修で修得している。入居者への呼びかけ方は入居前の情報を基に周囲からどのように呼ばれていたかを参考に各入居者に合った呼びかけを行なっている。訪問調査時も入居者と職員の「ありがとう」との言葉を何回も耳にした。馴れ合いや気の緩みから好ましくない言動があれば管理者が直接指導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の会話の中から本人の思いを聴くように努めている。また本人に合わせた説明を行い、小さなことも自己決定ができるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員は話題の投げかけを通して入居者のその日の意向を把握するようにしている。天候を見ながら、希望者数名が近くの複合施設へのゴミ出しを兼ねた散歩やホームの日用品を車での買い出しなどに外出している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が着たい衣類を選べるように支援したり、行事や、外出の際、おしゃれをする等している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は法人本部の栄養士が立てている。メニューによってはホームで調理出来ない事もあり、ホーム独自にアレンジすることもある。一人ひとりの状態に合わせ1口大等食べやすい形に工夫している。また、ホームの庭で作られた野菜が食卓に上ることもある。職員も同じテーブルに座り一緒に食べている。	食事に関する入居者の日常的な作業はテーブル拭きや食器の片付け、下ごしらえ、味見などをしている。食事介助を受ける入居者も多いが、職員は本人にもスプーンや箸を持ってもらい自分でも一口、二口と口に運ぶよう促していた。暑さ除けの緑のカーテンで育ったキュウリが9月下旬までに約30本ほど収穫でき、家族や兄弟からの野菜の差し入れとともに食卓を彩っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者一人ひとりの食事量、水分摂取量は把握されている。記録にも残されており、職員は情報として共有している。食事の献立は法人本部の栄養士が立てており、1日のカロリー計算は十分されている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に、口腔ケアを促し必要によって一部介助を実施。また義歯の方は、週2回洗浄剤で清潔保持に努めている。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	必要に応じて、排泄状況を記録し、パターンをつかんでいる。また、それに合わせて、声掛けや誘導を実施している。	1名の方は普通のパンツ、8名の方がリハビリパンツにパットで過ごしている。入居者一人ひとりに合わせて声掛けや誘導、見守りを行いながらトイレでの排泄や排泄の自立に向けて支援している。夜間頻回に起きてはトイレに通う入居者について医師にも相談したが、日中寝ているわけでもなく普通に過ごしており、本人の生活リズムとして様子を見ている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝飲むヨーグルトを飲用して頂いている。また、冷たい牛乳や水分の促し、歩行訓練など実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は基本的には週2回行っている。それ以外の対応については特に、夏場、清拭等で対応している。季節により菖蒲やゆず等を入れ目で楽しめるよう工夫をしている。	お風呂は毎日準備をし本人が入りたい時に入浴できるようにしている。立位ができない方には二人介助の都合で入浴時間を決めて声をかけている。ターミナル対応の方に関しては訪問看護師が見えた時に入浴している。今年3月には入居者と職員全員で市内の温泉に出かけ楽しんだ。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの尊厳・情報保護について職員は理解しており、利用者の誇りやプライバシーを損ねるような対応・言葉かけはされていない。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の処方箋ファイルもあり、職員は内容を確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中でレクリエーション、体操等、刺激となるよう実施している。誕生日会も行い、職員手作りのお祝いカードを手渡している。出来る利用者には洗濯物干し・たたみ、食事の盛り付け、食器拭き等、普段の生活の中に一人ひとりの役割を持てるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望があれば事前に計画し、外出の機会をつくっている。	法人の車を借りて春は小諸市の懐古園へのお花見や市内の国分寺公園の「カバンの藤」を見に出かけ、夏には近くの商店街の七夕見学、秋には東御市の公園の紅葉狩りと四季折々に外出している。皆で出かけると入居者はいい表情になるので外出の機会を多く取り入れている。近くのスーパーへの食料品などの買い物にはホームの車で車椅子の方も一緒に出掛けている。	

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人ひとりの金銭管理力量を検討し、小銭程度でも持って買い物の際に支払えるよう家族とも相談し、取り組んでいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけたいという希望があれば、電話を貸し出している。また個々に家族や知人等に手紙を出す支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合った装飾品を飾り、季節感を取り入れ、照明・材質も温かみを感じられるものを使用している。	陽ざしが窓からいっぱい差し込む明るいリビングで入居者はテーブルを囲みテレビを見たり、パズルに興じたり、計算や塗り絵や読書、歩行練習など思い思いのことをしながら職員と共に過ごしている。壁には外出先でのスナップ写真の掲示や絵画・入居者の作品などが見られた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者自身がくつろげる場所を確保している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室にはタンス、テレビ、机、椅子、本、辞書、虫眼鏡など使い慣れたものが持ち込まれている。入居者や職員の手作りによる誕生日お祝いカードが数枚大切に貼られている居室もある。	8畳はある広めの居室には家族が本人のためにと用意した家具や机、椅子、ご主人の写真や家族写真、本人が作った手作りの人形や大学ノートの日記帳、本などが持ち込まれていた。入居者はそれらに囲まれながら穏やかに日々過ごしている。日当たりの良い居室の窓には緑のカーテン用にキュウリが植えられていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ等の張り紙をして分かりやすく表示し、混乱や失敗を防ぐ工夫をしている。		